藍野学院紀要, 第14巻, 2000, pp. 33－42

〔**Original Papers**〕

# A study on development of paternity : survey using androgyny scale

Yumi Hiruta*

* Aino Gakuin College

**Abstract**

We surveyed the consciousness of daily life and actual situation of child care by 777 working fathers in the Tokyo Metropolitan area. The purpose of this survey was to understand the process and development of paternity in fathers.

Methods we used were : (1) questionnaires of consciousness of daily life and actual situation of child care with fathers, (2) measurement of fathers' attachment to their wives and children, and (3) measurement of psychological androgyny. Based upon the results some factors of development of paternity are suggested : Depending on the age of the fathers, characteristics of daily life and child care were varied. Thus, consciousness of fathers' age is a factor of development of paternity. As children grew, contact between fathers and children and family relationship became weaker. Psychological androgyny of personality is also related to child care and family relations. The higher the score of masculinity, the more the activity relationship formed on the network between children and families. And the higher the score of femininity, the closer the relationship between children and families.

**Key words** : paternity, child care with father, attachment, psychological androgyny, androgyny scale

〔原　著〕

# 父性意識の発達に関する研究

## ――アンドロジニースケールを用いての検討――

蛭田由美*

【要　旨】父性意識が発達する過程とその要因を明らかにすることを目的に，首都圏を中心とした勤労者家族の父親777名を対象に，生活意識および子育て参加の実態などに関する調査を行った。調査内容は，著者らが作成した父親の生活と子育てに関する質問紙調査，妻及び子どもに対する愛着の測定，アンドロジニー・スケールによる男女両性具有性の測定であった。調査結果から，次のように父性意識の発達に影響する要因が示唆された。すなわち，父親の年代によって，家庭生活や仕事および子育て参加に特徴がみられ，父親の年齢は父性意識に影響を及ぼす要因と考えられた。子どもの年代別には，子どもの成長に伴って，父親の子どもとの関わりや家族関係は希薄になる傾向がみられた。父親のパーソナリテイとしての男女両性具有性と子どもとの関わりや家族関係の持ち方に関連がみられ，男性性が高いほど子どもや家族との関係は活発で，女性性が高いほど子どもや家族との関わりは親密になる傾向がみられた。

キーワード：父性意識，父親の子育て参加，愛着，男女両性具有性，アンドロジニー・スケール

## I．はじめに

子育ては従来，主として母親だけに委ねられ，父親の参加は間接的なものに押さえられてきた。その理由の一つに，発達理論の研究において，父親は生計の維持のために外で働き，母親は家庭の運営と子どもの養育の責任を負うという性別役割分業が家族の形および親子関係の理想として一般化されたことがあげられる。

Persons（1970）は，子どもの社会化に父親は大きな役割を持っているとし，元来社会的存在である父親は，子どもを社会に関係づける機能を持っているとした。また，Lamb（1980）は，7カ月から24カ月までの乳児と両親の交流を通して，乳児－母親関係と乳児－父親関係は質的に異なっていることを観察した。例えば，母親は父親よりもよく乳児を抱くが，父親に対する乳児の反応は有意に積極的であった。しかし，汐見（1989）は，いわゆる「母性本能」は本能というより，子どもを育てる過程で父親にも同じように育つものであるとして，「母性」「父性」という機械的な分担論をやめて，夫婦で相談協議しながらケースバイケースで分担し合う「親性」という概念を提唱した。

近年，少子高齢社会の到来への危機感が高まり，また，子どもの発達上の様々な問題への対応が求められる中，「父親の家庭復帰」，「父親の子育て参加」，「子育てにおける父権の復活」などが叫ばれるようになってきた。しかし，父親自身を対象とした子育て参加の意識や実態についての調査はほとんど行われておらず，父親の子育て観や家族観などは，明らかにされていない。そこで，父性意識が発達する過程とその要因を明らかにし，父性意識発達促進のための支援方法を検討することを目的に，首都圏を中心とした勤労者家族の父親を対象に，生活意識および子育て参加の実態など

* 藍野学院短期大学

についての調査を行った。

## Ⅱ．研究方法

### 1．調査対象，調査方法，調査期間

調査対象，調査方法，調査期間は，次のようであった。

1）東邦大学医学部大森病院において出生した乳幼児を持つ父親　167名

1993年1月から1998年5月までに出生した乳幼児を持つ父親の中から，妻が妊娠中に重症の妊娠合併症を伴ったもの，分娩異常のあったもの，新生児異常のあったものを除いて，無作為に抽出し直接または郵送法により調査を依頼した。

調査依頼数は203，回収数は167，回収率は82.3%であった。

2）社団法人東京都教職員互助会三楽病院において出生した乳幼児を持つ父親　216名

1993年1月から1998年5月までに出生した乳幼児を持つ父親の中から，妻が妊娠中に重症の妊娠合併症を伴ったもの，分娩異常のあったもの，新生児異常のあったものを除いて，無作為に抽出し直接または郵送法により調査を依頼した。

調査依頼数は250，回収数は216，回収率は86.4%であった。

3）製薬会社4社における子どもを持つ男性社員　190名

製薬会社4社における子どもを持つ男性社員を，各社無作為に50名ずつ抽出し，合計200名に調査を依頼した。調査標の配布と回収は郵送法によって行った。回収数は190，回収率は95.0%であった。

4）M乳業会社における子どもを持つ男性社員204名

M乳業会社の全国の支社から，子どもを持つ男性社員を無作為に抽出し，250名に調査を依頼した。調査標の配布と回収は郵送法により，回収数は204で，回収率は81.6%であった。

以上，調査対象4群の総数は903，調査票回収総数は777，回収率は86.0%であった。調査期間は1997年6月から1999年2月までであった。

### 2．調査内容

調査内容は以下のようであった。

1）父親の生活と子育てに関する質問紙調査

① 対象の特性

年齢，職種，役職，出身地，きょうだいの数，きょうだいの中での順位

② 家庭生活と仕事

結婚年数，子どもの数，子どもの性別，子どもの年齢，妻の就業形態，休日の過ごし方，家事の参加度，仕事の満足度，日頃の体調

③ 子どもとの関わり

出産の立ち会いの有無，日頃の子どもとの関わり，子どもとの関わりの理由，子どもの興味や関心についての理解，子どもとの関わりに対する妻の態度

④ 子育て観，家族観

子どものしつけ方，養育について妻と意見の相違がある時の対応，父親としての家族への協力の仕方，期待する子育て支援，父親としての自己認識

2）妻および子どもに対する愛着の測定

愛着尺度は，大日向（1988）により開発されたものを用いた。これは，愛着を特定の他者に対して愛情の絆を求めようとする要求であるとし，これを，行動，関心，理解・支持の3様式とし，「相手を支えたい，愛したい」という表出（expressed）方向と，「相手に支えてもらいたい，愛されたい」という要求（wanted）方向から測定する項目を18項目設定したものである。各項目に対して「その通り」から「違う」までの4段階で答えを求め，合計点を求める。得点の範囲は，18点から72点までで，得点が高いほど愛着が強いことを示す。

3）アンドロジニー・スケールによる男女両性具有性の測定

アンドロジニー・スケールは，独立した2次元の男性性スケールと女性性スケールからなる男女両性具有性を測る尺度で，Bem（1974）らが開発し，土肥（1988）が改訂したものを使用した。男性性に固有の特性は作動性（agency）で，個人の自己維持，自己主張，自己拡大の機能の活発さであり，女性性に固有の特性は共同性（communion）で，集団成員の中での協調性，宥和性が高いなどである。男性性スケール10項目，女性性スケール10項目から構成され，「よくあてはまる」から「全くあてはまらない」までの5段階で答えを求め，男性性，女性性それぞれに合計点を求める。得点の範囲は男性性得点，女性性得点それぞれに10点から50点までで，得点が高いほど男性性，女性性が高いことを示す。

アンドロジニー・スコアーは，その得点をもとに4つのタイプに分類される。対象者の男性性得点，女性

性得点のそれぞれの中央値を求め，

① 男性性，女性性得点がともに中央値以上のものをandrogyny型　（以下，A型）

② 男性性得点のみ中央値以上のものをmasculinity型　（以下，M型）

③ 女性性得点のみ中央値以上のものをfemininity型　（以下，F型）

④ 男性性得点，女性性得点ともに中央値に満たないものをundifferentiated型（以下，U型）

とするものである。

### 3．データの解析方法

データの解析には，Microsoft Excel 97およびSPSS 8.0 J for Windowsを用いた。父親の子育て参加の実態を目的変数とし，説明変数に父親の年齢，子どもの年齢，職種，役職の有無，アンドロジニー・タイプをおき，家庭生活と仕事，子どもとの関わり，子育て観・家族観など父性意識の発達に影響を及ぼすと考えられる調査項目との関連を検討した。

## Ⅲ．調査結果

調査対象は，4つの異なった母集団から抽出したが，対象の基本的属性の4群間に差がみられなかったため，まとめて集計・分析した。

### 1．調査対象の基本的属性（表1）

調査対象の平均年齢は40.6 ± 8.8（平均値±標準偏差）歳で，年齢幅は24歳から65歳であった。職種で，公務員と分類したものの多くは教員であった。出身地は，関東が半数を占め，北海道から沖縄まで全国にまたがっていた。対象自身のきょうだいの数の平均は2.8人であった。対象の年齢が高くなるにしたがってきょうだいの数は多くなり，50歳以上では4.3人であった。子どもの数の平均は1.9人で，父親の年齢が高くなるにしたがって，子どもの数も多くなった。子どもの年齢は第1子について集計し，平均年齢は10.7歳であった。本調査の対象の70%近くのものは，子育てに最も手の掛かる乳幼児と学齢期にある子どもを持っていた。妻の就労状況は，無職が58%と最も多く，フルタイムの仕事，パートタイムの仕事はそれぞれ20%弱であった。

表1　対象の基本的属性

| 項目 | | 数 | % |
|---|---|---|---|
| 平均年齢 | | 40.6歳 | |
| 年齢構成 | 20歳代 | 39 | 5.0 |
| | 30歳代 | 376 | 48.4 |
| | 40歳代 | 206 | 26.5 |
| | 50歳以上 | 154 | 19.8 |
| | 無回答 | 2 | 0.3 |
| 職種 | 会社員 | 366 | 47.1 |
| | 公務員 | 100 | 12.9 |
| | 営業職 | 134 | 17.2 |
| | 事務職 | 27 | 3.5 |
| | 技術職 | 61 | 7.9 |
| | その他 | 80 | 10.3 |
| | 無回答 | 9 | 1.2 |
| 役職 | 非管理職 | 424 | 54.7 |
| | 管理職 | 207 | 26.6 |
| | その他 | 69 | 8.9 |
| | 無回答 | 77 | 9.9 |
| 出身地 | 東京都 | 283 | 36.4 |
| | 関東 | 141 | 18.1 |
| | 関西 | 73 | 9.4 |
| | その他 | 270 | 34.7 |
| | 無回答 | 10 | 1.3 |
| 平均きょうだい数 | | 2.8人 | |
| 平均子ども数 | | 1.9人 | |
| 子どもの平均年齢 | | 10.7歳 | |
| 子どもの年齢構成 | 0～3歳 | 220 | 28.3 |
| | 4～6歳 | 180 | 23.2 |
| | 7～12歳 | 132 | 17.0 |
| | 13～15歳 | 46 | 5.9 |
| | 16～18歳 | 31 | 4.0 |
| | 19～22歳 | 42 | 5.4 |
| | 23歳以上 | 122 | 15.7 |
| | 無回答 | 4 | 0.5 |
| 妻の就労 | 無職 | 451 | 58.0 |
| | フルタイム | 137 | 17.6 |
| | パートタイム | 138 | 17.8 |
| | その他 | 48 | 6.1 |
| | 無回答 | 3 | 0.4 |
| 家族形態 | 核家族 | 604 | 77.7 |
| | 拡大家族 | 152 | 19.6 |
| | その他 | 11 | 1.4 |
| | 無回答 | 10 | 1.3 |

子どもの年齢は第1子について集計した。

### 2．父親の家庭生活と仕事（表2）

1）休日の過ごし方

父親の休日の過ごし方は，「家の中で家族と一緒に過ごす」，「家族と一緒に外出する」というものが併せてほぼ70%であった。一方「仕事をする」，「外出して自分の趣味をする」，「家の中で自分の趣味をする」，「家の中で一人のんびりする」というものが併せてほぼ30%であった。年代別にみると，父親の年齢が若いほど，家族と一緒に過ごすというものが多く，20歳代・30歳代ではほぼ80%前後，40歳代では65%，50歳代では34%であった。自分の趣味をするというものは，父親の年齢が高くなるにしたがって多くなり，

表2　父親の家庭生活と仕事

| 項目 | 内容 | 数 | % |
|---|---|---|---|
| 休日の過ごし方*1 | 仕事をする | 31 | 4.0 |
| | 家事をする | 15 | 1.9 |
| | 外出して自分の趣味をする | 113 | 14.5 |
| | 家の中で自分の趣味をする | 44 | 5.7 |
| | 家の中で一人でのんびりする | 41 | 5.1 |
| | 家の中で家族と一緒に過ごす | 245 | 31.5 |
| | 家族と一緒に外出する | 310 | 39.9 |
| | その他 | 24 | 3.1 |
| | 無回答 | 1 | 0.1 |
| 家事の参加度 | とても積極的にやっている | 54 | 6.9 |
| | ある程度積極的にやっている | 303 | 39.0 |
| | あまり積極的にやっていない | 275 | 35.4 |
| | 全くやっていない | 142 | 18.3 |
| | 無回答 | 3 | 0.4 |
| 仕事の満足度 | 非常に満足している | 91 | 11.7 |
| | ある程度満足している | 525 | 67.6 |
| | あまり満足していない | 135 | 17.4 |
| | 全く不満である | 17 | 2.2 |
| | 無回答 | 9 | 1.2 |
| 日頃の体調 | 心身ともに快調である | 164 | 21.1 |
| | 疲れやすい | 151 | 19.4 |
| | いらいらしやすい | 50 | 6.4 |
| | 心身ともに不調である | 16 | 2.1 |
| | その他 | 12 | 1.5 |
| | 無回答 | 384 | 49.4 |
| 出産の立会い | 立ち会った | 287 | 36.9 |
| | 立ち会わなかった | 488 | 62.8 |
| | 無回答 | 2 | 0.3 |

*1　複数回答

20歳代・30歳代ではほぼ15%前後であるのに対し，40歳代・50歳代ではほぼ25%前後であった。これを子どもの年齢別にみても同様の傾向がみられた。子どもの年齢が12歳までは家族とともに過ごすというものが80%を越え，特に家族と一緒に外出するというものの割合が高かった。

2）日常の家事の参加度

日常の家事の参加度は，「とても」と「ある程度」併せて積極的にやっていると答えたものはほぼ46%，「あまり」と「全く」やっていないものはほぼ54%であった。

3）仕事に対する満足度

仕事に対する満足度は全体的に高く，「非常に」と「ある程度」併せて80%近くを占めた。

4）日頃の体調

日頃の体調は，「心身共に快調」というものは半数に満たず，父親の半数以上は心身に何らかの不調を抱えていた。

5）出産への立ち会い

出産への立ち会いについては，「立ち会った」と答えたものは40%弱，「立ち会わなかった」というものは60%強であった。この項目は，「あなたは，お子さまが生まれたときお産に立ち会いましたか」と質問し，これに対して「立ち会った」または「立ち会わなかったのどちらかを選択してもらったものである。「立ち会い」について詳細な説明や規定をしなかったために，「立ち会った」と答えたものの中には，必ずしも分娩第2期に分娩室に入って出産に立ち会ったものだけでなく，分娩室の前や待合室で待機していた人も含まれている。

### 3．父親の子育て参加の実態（表3）

1）子どもとの関わり

日頃の子どもとの関わりは，「とても積極的に持っている」と「ある程度積極的に持っている」というもの併せてほぼ80%，「あまり持っていない」と「全く持っていない」というものは併せて20%弱であった。年代別にみると，父親の年齢が若いほど，子どもとの関わりは積極的であった。子どもの年代別にみても，子どもの年齢が低いほど，父親は積極的に関わりを持っていた。

2）子どもとの関わりを持つ理由

子どもとの関わりを持つ理由は，回答の多かったものから「子どもとの関わりが楽しいから」，「子どもが好きだから」，「子どもにいろいろなことを教えたい」という順であった。

3）子どもの興味や関心についての理解

子どもの興味や関心についての理解は，「よく知っている」と，「だいたい知っている」というものは併せて70%を越え，「あまり知らない」と，「全く知らない」というものが20%であった。

4）子どもとの関わりに対する妻の態度

父親の子どもとの関わりに対する妻の態度は，「支持したり賛成することが多い」と「支持したり制限したりどちらともつかない」というものはほぼ同率で，「制限したりやめさせることが多い」というものはわずかであった。

5）子どものしつけ方

子どものしつけ方は，「男の子は男らしく，女の子は女らしく育てたい」というものが約半数，「男女区別無く同じように育てたい」というものは40%であった。

6）子どもの養育について妻と意見の相違があるときの対応

子どもの養育について妻と意見の相違がある時の対応は，「二人で納得いくまで話し合う」というものが50%，続いて「主に妻の意見の通りにする」というも

表3　父親の子育ての実態

| 項目 | 内容 | 数 | % |
|---|---|---|---|
| 子どもとの関わり | とても積極的に持っている | 167 | 21.5 |
| | ある程度積極的に持っている | 432 | 55.6 |
| | あまり持っていない | 123 | 15.8 |
| | 全く持っていない | 14 | 1.8 |
| | 無回答 | 41 | 5.3 |
| 子どもとの関わりの理由*2 | 子どもにいろいろなことを教えたい | 149 | 19.2 |
| | 自分の夢や生き方を子どもに託したい | 26 | 3.3 |
| | 子どもが好きだから | 175 | 22.5 |
| | 仕事より子どもの養育の方が大切だから | 27 | 3.5 |
| | 子どもを妻任せにしてはいけないと思う | 99 | 12.7 |
| | 子どもとの関わりが楽しい | 195 | 25.1 |
| | 子どもとの関わりは自分を成長させる | 33 | 4.2 |
| | その他 | 41 | 5.3 |
| | 無回答 | 57 | 7.3 |
| 関心の理解 | よく知っている | 136 | 17.5 |
| | だいたい知っている | 433 | 55.7 |
| | あまり知らない | 118 | 15.2 |
| | 全く知らない | 27 | 3.5 |
| | 無回答 | 63 | 8.1 |
| 妻の態度 | 支持したり賛成する事が多い | 270 | 34.7 |
| | 制限したりやめさせることが多い | 39 | 5.0 |
| | 賛成したり制限したりどちらともつかない | 261 | 33.6 |
| | ほとんど干渉しない | 128 | 16.5 |
| | その他 | 21 | 2.7 |
| | 無回答 | 58 | 7.5 |
| しつけ方 | 男の子は男らしく，女の子は女らしく | 385 | 49.5 |
| | 男女区別なく | 303 | 39.0 |
| | わからない | 38 | 4.9 |
| | その他 | 39 | 5.0 |
| | 無回答 | 12 | 1.5 |
| 意見が違う時 | 主に自分の意見を通す | 106 | 13.6 |
| | 主に妻の意見を通す | 205 | 26.4 |
| | 二人で納得いくまで話し合う | 382 | 49.2 |
| | その他 | 56 | 7.2 |
| | 無回答 | 28 | 3.6 |
| 家族への協力の仕方 | 仕事に打ち込むことで協力する | 36 | 4.6 |
| | 家事などを手伝う | 27 | 3.5 |
| | 妻や家族の相談相手となる | 217 | 27.9 |
| | 子どもと遊ぶ | 23 | 3.0 |
| | 重要な事柄の最終決定をする | 84 | 10.8 |
| | 子どもの身辺の世話をする | 2 | 0.3 |
| | その他 | 7 | 0.9 |
| | 無回答 | 381 | 49.0 |
| 期待する子育て支援 | 教育費の負担の軽減 | 33 | 4.2 |
| | 教育制度・内容の改革 | 45 | 5.8 |
| | 税の優遇制度 | 51 | 6.6 |
| | 子育て環境の整備 | 43 | 5.5 |
| | 扶養給の支給 | 4 | 0.5 |
| | 休暇・ゆとり | 34 | 4.4 |
| | その他 | 8 | 1.0 |
| | 特にない・期待できない | 45 | 5.8 |
| | 無回答 | 514 | 66.2 |
| 父親としての自己認識 | 世間並みの父親である | 23 | 3.0 |
| | 父親らしくない・父親失格 | 53 | 6.8 |
| | 良い父親である | 39 | 5.0 |
| | 妻任せが多い | 14 | 1.8 |
| | 甘い父親である | 17 | 2.2 |
| | 厳しい父親である | 14 | 1.8 |
| | 家族を大切にしたい | 66 | 8.5 |
| | その他 | 15 | 1.9 |
| | 無回答 | 536 | 69.0 |

＊2　複数回答

のが30%弱，「主に自分の意見を通す」というものは14%程度であった。

7）父親としての家族への協力の仕方

父親としての家族への協力の仕方として望ましいと考えるのは，「妻や家族の相談相手になる」がほぼ55%，「重要な事柄を最終決定する」がほぼ21%であった。年代別にみると，「重要な事柄の最終決定」が年代が高くなるにつれて多くなり，「子どもと遊ぶ」というものは年代が若いほど多いという特徴がみられた。

8）父親としての自己認識

この項目は，「日頃の父親としてのご自分を，どのように思われますか」と質問し，自由に記入してもらったものである。その回答の内容の類似したものをまとめて分類した。父親としての自己認識の内容の主なものは，「父親らしくない・父親失格である」というもの，逆に「良い父親である」というもの，「家族を大切にしている（したい）・家族とのコミュニケーションを大切にしている（したい）」というものなどであった。

## 4．愛着得点

愛着得点の平均（表4）は，妻に対する愛着得点が59.7 ± 8.7（平均値±標準偏差）点，子どもに対する愛着得点が59.8 ± 7.7点であった。項目毎の得点は，行動，関心，理解・支持のいずれの項目も，表出（expressed）方向の得点が要求（wanted）方向の得点より高い値を示し，子どもに対する愛着は特にこの傾向が強く現れていた。年代別にみると，妻に対する愛着は20歳代が最も高く，年代が上がるにしたがって徐々に低くなった。子どもに対する愛着は20歳代から30歳代へと若干上昇し，40歳代以上では徐々に下降した（$p < 0.01$）。

表4　年代別愛着得点及びアンドロジニー・スコア

| | 愛着得点 | | アンドロジニー・スコア | |
|---|---|---|---|---|
| | 対妻 | 対子 | 男性性 | 女性性 |
| 20歳代 (N＝39) | 63.5 (9.4) | 60.6 (6.0) | 33.1 (6.6) | 31.4 (6.2) |
| 30歳代 (N＝376) | 60.8 (8.3) | 61.1 (4.2) | 34.5 (6.3) | 33.7 (5.8) |
| 40歳代 (N＝206) | 59.3 (8.7) | 58.9 (6.8) | 33.9 (6.4) | 34.0 (6.0) |
| 50歳代 (N＝154) | 56.3 (8.2) | 57.7 (8.6) | 35.0 (6.5) | 34.0 (6.1) |
| 全体 (N＝777) | 59.7 (8.7) | 59.8 (7.7) | 34.4 (6.5) | 33.7 (6.0) |

平均値（標準偏差）

### 5．アンドロジニー・スコアおよびアンドロジニー・タイプ

アンドロジニー・スコアの平均（表4）は，男性性得点が34.4±6.5点，女性性得点が33.7±6.0点で，男性性得点と女性性得点の間に差はみられなかった。年代別には，どの年代でも，男性性得点と女性性得点の間に差はみられなかったが，年代が上がるにしたがって，男性性得点も女性性得点もともに徐々に上昇する傾向を示した。

アンドロジニー・タイプの人数と割合（表5）は，最も多かったタイプはU型で，続いてA型，F型，M型の順であった。年代別のアンドロジニー・タイプの割合（表5）は，年代が上がるにしたがってA型が多くなり，U型が減少した。職種別のアンドロジニー・タイプは，A型は営業職と公務員に，M型は事務職に，F型は営業職に，U型は技術職に多い傾向がみられた。役職別には，管理職にはA型が多く，非管理職にはU型が多かった。

### 6．アンドロジニー・タイプと父親の家庭生活と仕事および子育て参加の実態との関連

アンドロジニー・タイプと父親の家庭生活と仕事および子育て参加の実態との関連をみると，次のようであった。

1）休日の過ごし方（図1）

主な休日の過ごし方で，仕事をするというものはA型に多く，家事をするというものはF型とU型に多かった。家であるいは外出して家族とともに過ごすというものは，アンドロジニー・タイプ別の差はみられなかった。

2）日常の家事の参加度（図2）

日常の家事の参加度は，A型とF型がM型とU型に比べて高かった。

表5　年代別アンドロジニー・タイプ

| | アンドロジニー・タイプ | | | | |
|---|---|---|---|---|---|
| | A型 | M型 | F型 | U型 | 無回答 |
| 20歳代 (N＝39) | 8 (20.5) | 6 (15.4) | 8 (20.5) | 16 (41.0) | 1 (2.6) |
| 30歳代 (N＝376) | 95 (25.7) | 74 (19.7) | 63 (16.8) | 133 (35.4) | 21 (5.6) |
| 40歳代 (N＝206) | 74 (35.9) | 26 (12.6) | 46 (22.3) | 53 (25.7) | 7 (3.4) |
| 50歳代 (N＝154) | 47 (30.5) | 27 (17.5) | 33 (21.4) | 40 (26.0) | 6 (3.9) |
| 全体 (N＝777) | 231 (29.7) | 134 (17.2) | 152 (19.5) | 247 (31.8) | 13 (1.6) |

人数（%）

3）仕事の満足度

仕事の満足度は，非常に満足しているというものはA型に最も多く，全く不満であるというものはM型に最も多かった。

4）日頃の体調

日頃の体調は，心身共に快調であるというものはM型に最も多く，心身ともに不調であるというものはF型とU型に多かった。

5）出産への立ち会い

子どもの出産に立ち会ったというものは，A型が最も多く，F型が最も少なかった。

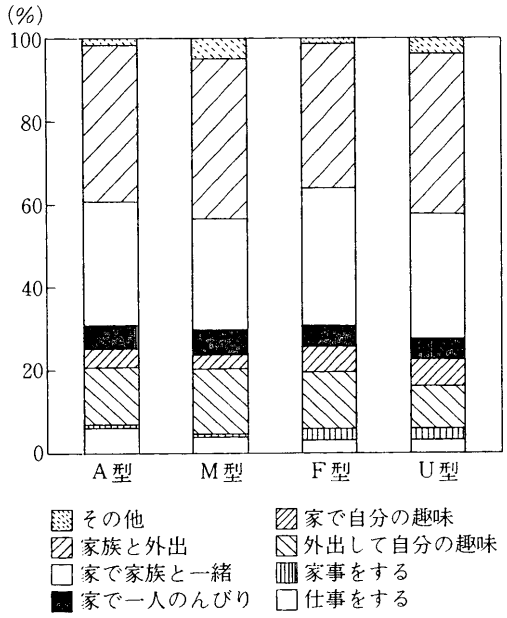


図1　休日の過ごし方

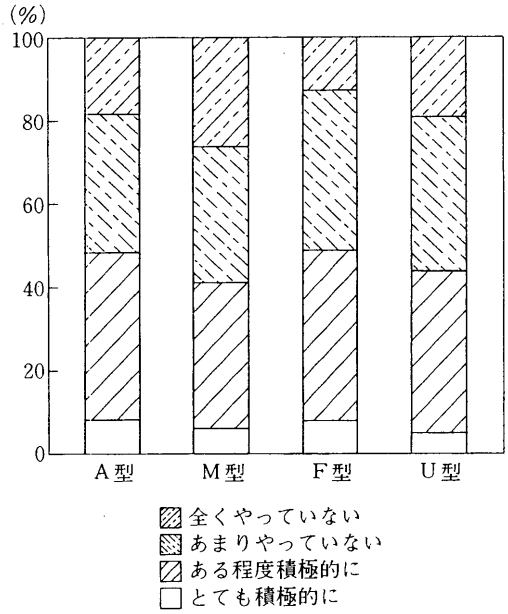


図2　日常の家事の参加度

6）子どもとの関わり（図3）

日頃の子どもとの関わりは，A型が関わりの度合いが若干高い他は，タイプ別に差はみられなかった。

7）子どもとの関わりの理由

子どもとの関わりの理由は，タイプ別に特徴はみられなかった。

8）子どもの興味や関心についての理解度（図4）

子どもの興味や関心についての理解は，A型が他のタイプに比べて高かった。

9）子どもとの関わりに対する妻の態度

父親の子どもとの関わりに対する妻の態度は，支持・賛成するというものがU型に少なかった他は，タイプ別の差はみられなかった。

10）子どものしつけ方

子どものしつけ方は，男の子は男らしく，女の子は女らしく育てたいというものはA型とF型に多く，男女区別無く育てたいというものはM型とU型に多かった。

11）子どもの養育や教育について妻と意見が違うとき

子どもの養育や教育について妻と意見が違う時の対応は，主に自分の意見を通すというものはM型に多く，主に妻の意見を通すというものはF型に多く，二人で納得いくまで話し合うというものはA型に多かった。

12）家族への協力のしかた（図5）

父親としての家族への協力の仕方として望ましいと考えていることは，仕事に打ち込むことで協力するというものはA型とM型に多く，家事などを手伝うというものはM型とU型に多く，子どもと遊ぶというものはF型とU型に多く，重要な事柄の最終決定をするというものはA型に多かった。家族の相談相手となるというものはタイプ別に差はみられなかった。

13）父親としての自己認識（図6）

父親としての自己認識は，世間並みの父親であるというものはA型に多く，父親らしくない・父親失格であるというものはM型とU型に多く，家族を大切にしたい・コミュニケーションをとりたいというものはM型とU型に多く，良い父親であるというものは

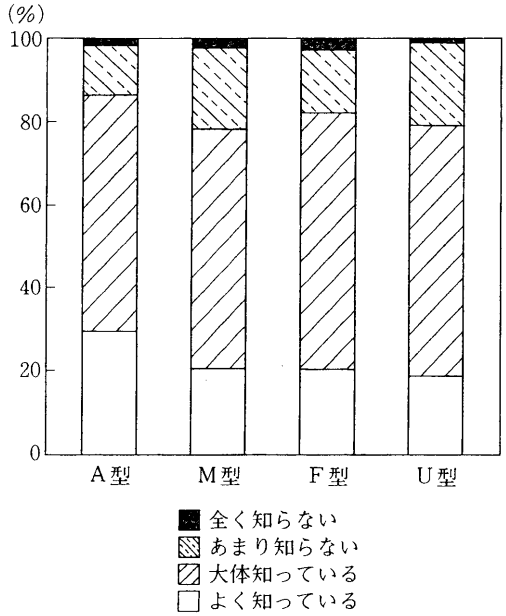


図4　子どもの興味や関心についての理解度

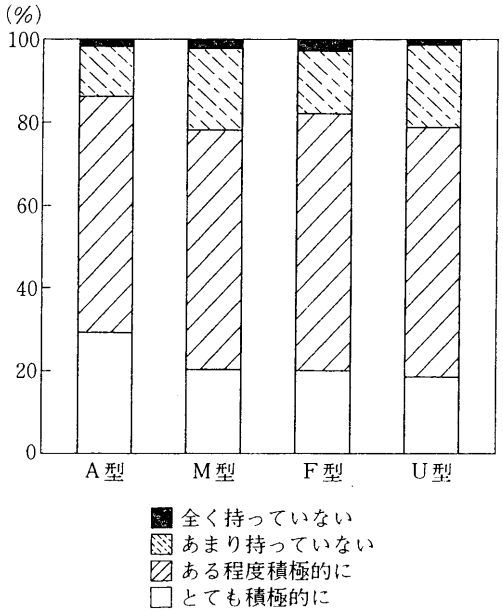


図3　子どもとの関わり

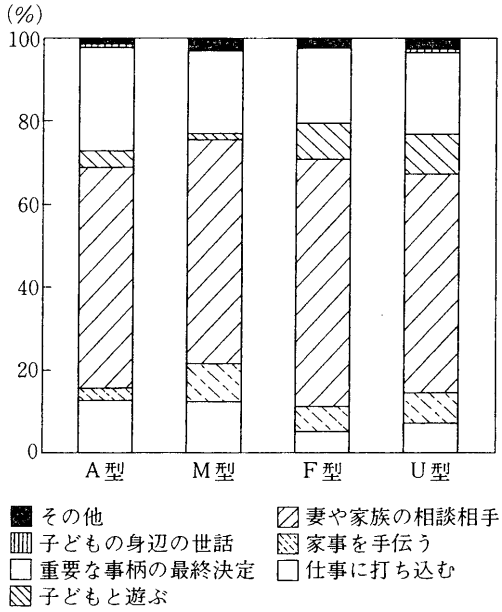


図5　家族への協力の仕方

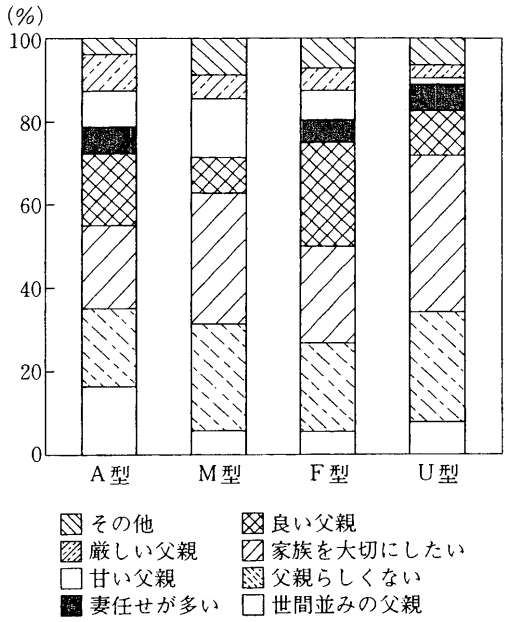


図6　父親としての自己認識

F型に多く，甘い父親であるというものはM型に多かった。

14）愛着得点（表6）

アンドロジニー・タイプ別の愛着得点は，最も高い得点を示したのはA型で，次いでF型，M型で最も低かったのがU型であった。

## Ⅳ．考　　察

本調査の対象は，家族形態や夫婦の就業分担，仕事の面で次のような特徴を示していた。家族形態では核家族の割合が多く，1995年度の国勢調査の結果（1998）を20%も上回っていた。これは，首都圏を中心とした勤労者家族の父親を，調査対象としたことによるものと考えられる。また，妻の就労状況では無職が多く，1997年度の労働力調査特別調査（1998）の専業主婦世帯を20%も上回っていた。これは，調査対象の50%余りが乳幼児の父親であることによる特徴と考えられ，核家族の割合が高いことも，この特徴を助長していたと考えられる。また，妻の就業率の低さからは，1997年度国民生活選考度調査（1998）の夫の年収が上がると低下する妻の就業率からみて，かなり高い年収を得ている対象と考えられる。仕事に対する満足度の高いことからも，内助の功を得て仕事に打ち込む会社人間という，典型的な日本の男性勤労者集団とみることができる。

一方，家族関係や子どもとの関わりでは，本調査の対象は，概ね積極的な関わりを持っていると考えられる。1988年の総務庁の「子どもと父親に関する国際調査」（1988）では，日本の父親の休日の過ごし方として，自分の趣味のために時間を使ったり，ひとりで過ごす父親が多いのに対して，本調査の父親は家族と共に過ごすものが多かった。子どもとの関わりも，上記国際調査の日本の父親に比較して，子どもとの関わりを積極的に持っているものは30%ほども上回っていた。この2つの調査結果の比較が示すように，ここ10年間に日本の父親の子育てへの参加の度合いは確実に高まっていると考えられる。

表6　アンドロジニー・タイプ別愛着得点

| | アンドロジニー・タイプ | | | | 平均 N＝777 |
|---|---|---|---|---|---|
| | A型 N＝231 | M型 N＝134 | F型 N＝152 | U型 N＝247 | |
| 妻に対する愛着 | 61.2 (8.6) | 59.3 (9.0) | 60.0 (8.1) | 58.2 (9.1) | 59.7 (8.7) |
| 子に対する愛着 | 61.2 (7.9) | 59.3 (7.1) | 59.8 (7.3) | 58.5 (8.5) | 59.8 (7.7) |

平均値（標準偏差）

父親の性格特性としての男女両性具有性と，子どもとの関わりや家族関係の持ち方に次のように関連がみられた。

アンドロジニー・スケールの男性性得点も女性性得点も共に高いA型の父親は，仕事に対する満足感が高く，仕事に打ち込む一方で，家事の参加度も高く，子どもとの関わりは積極的で，子どもの関心についての理解度も高く，家族関係を積極的に持っていた。子どもとの関わりに対する妻の態度も支持賛成が多く，子どもの養育について夫婦で話し合うものが多く，夫婦関係は良好に保たれ，妻と子どもに対する愛着も最も強かった。男性性得点の高いM型の父親には，家族に対して愛着を持ちながら，子育ては妻に任せて，男性性の特性を表す作動性を発揮し，企業戦士としてバリバリ働く日本の典型的な男性勤労者の姿がみられた。このタイプの父親は，伝統的性別役割意識を持った家長的父親として，妻や子どもを保護すべき対象として愛情の絆を持とうとしているものと考えられた。女性性得点の高いF型の父親は，子どもや家族との関係の親密さを示し，家事や育児の負担を妻と分け合うという形で積極的な家族関係を持っていた。従来の家長的な権威をふりかざした父親ではなく，男女の性別に捉われない親役割を果たしていると考えられた。男性性得点も女性性得点もともに低いU型の父親は，仕事にも子どもとの関わりや家族関係にも消極的な面がみられ，作動性も共同性もともに未分化の状態にあると考えられた。

アンドロジニー・スケールからは，男性性が高いほど子どもや家族との関係は活発で，女性性が高いほど子どもや家族との関係は親密になる傾向がみられた。父性意識の発達は，父親自身の性格特性である作動性・共同性が子どもとの関わりや妻との関係の中で発達していく過程と捉えることができる。

## V. おわりに

おわりに，本調査の特徴を述べ今後の課題を明らかにしたい。

第1に，本調査では調査対象を4つの異なった母集団から抽出した。それは，サンプルの抽出にあたって，日本型企業社会の論理に組み込まれ長時間・重労働を余儀なくされている男性被雇用者の抽出をめざしたためである。この目的は達成でき，4群のサンプル間の基本的属性に大きな差がみられなかったため，まとめて集計分析した。

第2に，本稿では育児機能における父親・母親の役割を規定していないが，それは本研究が，子育てという営みは，我が子，父親および母親，産む産まないという関係性や性別にとらわれること無く，すべての大人が担うべき役割であり，父親も，母親もその他の育児担当者（社会的育児という観点も含めて）も，その時，その場で，できるあるいはふさわしい育児機能を果たすことが適切であるという立場に立っているからである。

第3に，少子化や子どもの健全な発育のための対策は，保健医療福祉の分野だけでなく，広く，労働，経済，教育など多くの分野の学際的な研究が必須の課題である。今後は，できる限り広い視点に立ち，多くの分野の研究者の指導を仰ぎながら，協同して研究を進めたい。

謝　辞

最後に，調査にご協力いただきました父親のみなさま，ならびに調査票の配布回収の労をとっていただきました製薬会社のMRの方々，M乳業会社の大谷理修様，東京都教職員互助会三楽病院松崎政代様，木村好秀先生，東邦大学医学部寺内敏文先生，東邦大学医療短期大学小笹由香様，斉藤益子先生に深謝申し上げます。

また，本研究をご指導くださいました大正大学大学院教授（母子愛育会・日本子ども家庭総合研究所所長）平山宗宏先生に心より感謝申し上げます。

本稿は，1999年度大正大学大学院修士課程に，修士論文として提出したものの一部に加筆修正したものである。

### 引用文献

Bem, S. L. (1974) The Measurement of Phychological Androgyny, J. Consult. Clin. Psychol. 42 (2)：155－162

土肥伊都子（1988）男女両性具有性に関する研究――アンドロジニースケールと性別化得点，関西学院大学社会学部紀要，57：70－75

Lamb, M. E.（1980）2歳児までのアタッチメント（愛着）の発達，Pedersen. F. A., 依田 明，加藤千佐子，黒岩 誠，向井敦子，小関 賢，金子智栄子，斉藤浩子，青柳 肇訳，父子関係の心理学，新曜社：27－53

丸山久美子（1993）アンドロジニー尺度，瀬谷正敏編，社会心理学における自己測定尺度，ソフィア：197－200

大日向雅美（1988）母性の研究，川島書店：201

Persons, T.（1970）橋爪雄一訳，父親の役割，家庭教育社：437

汐見稔幸（1989）父親と育児，母子保健情報，20：53－55

総務庁統計局「国勢調査（1997年）」（1998）平成10年版厚生白書，ぎょうせい：47

総務庁統計局「労働調査特別調査」（1998）平成10年版厚生白書，ぎょうせい：71

総務庁青少年対策本部編（1988）日本の父親と子供――アメリカ・西ドイツとの比較――，「子供と父親に関する国際比較調査」報告書，ぎょうせい：475－492